

中年期女性の個人志向性・社会志向性の発達に關与する要因

—年齢、ライフスタイル、理想と現実のずれに注目して—

伊藤 美奈子

1. 問題

1-1. 人間の発達をとらえる際の2つの方向性

人間の発達を、個の確立に関する「個性化」と、人との関係性に関する「社会化」という2つの経路からとらえる視点がある。個としての生き方を貫くことと人との調和や共存は、時に矛盾をはらむものであるが、その矛盾や葛藤を越えて人との関係性の中で自己実現を計るあり方が人間の成熟過程には必要不可欠とされる。たとえば Jung (1921) は、意識と無意識、内向と外向という相反する補完的特性の統合が重要であると論じ、ベイカン (Bakan 1966) も、人間存在の基本様態 modalities として、自己主張・自己拡大・自己保存、そして分化や他者からの分離といった機能様態を指す「個体維持機能 agency」と人間関係や人との融和、触れ合い、協同などに関わる「関係維持機能 communion」とに注目しており、これら両機能の統合は人間発達の究極的課題であるといわれる (Helson and Moane 1987; 伊藤 1998; 齋藤 1990)。以上の理論は、成熟した人格には相反する両極性の統合という条件が求められるという点で共通点を持つ。

近年、女性の生涯発達に対する関心が高まり、女性による女性のための理論の構築がなされつつある。ここに至るまでの流れの中では、女性の生き方を既存のモデル (男性モデル) に当てはめて論じることが試みられてきた。しかし、「個の確立」がテーマとなりがちな既存モデルを女性の発達に当てはめようとすると、そこに矛盾やずれが生じてくる。その流れの中で、女性の発達には「関係性の維持」という新たな視点から検討する必要があるとして、発達理論に対する批判的検討が続けられてきた。

たとえばエリクソン (Erikson, E. H.) 理論については、これに依拠した実証研究も多く、多様な測定方法や尺度が開発されている。いまや「アイデンティティ」という概念は、青年心理だけでなく人格形成を論じるに不可欠のものであるといっても過言ではない。しかしその反面で、「女性ではアイデンティティと親密性の課題解決の順序が異なる」という報告 (Hodgson and Fischer 1979; Josselson 1987; 高橋 1988) も出されている。これらの理論では、エリクソン理論が「分離を問題の中核とし、男性の発達を前提としている」点を指摘している (Gilligan 1982など)。この背景には、アイデンティティ課題は「個の確立」を主たるテーマとするのに対し、親密性課題は「関係性の維持」をテーマとしており、この2方向を二項対立的にとらえる見方 (伊藤 1999) があると考えられる。

この2方向は人間の発達をとらえる2つのプロセスにも対応する。1つは、個の確立に向かう「個人化」、そしてもう1つは人との関係性の成熟に関わる「社会化」である。ここでいう2つのプロセスは互いに対立や矛盾をはらむこともあるが、決して対極に向かうものではなく、一方からもう一方へと直線

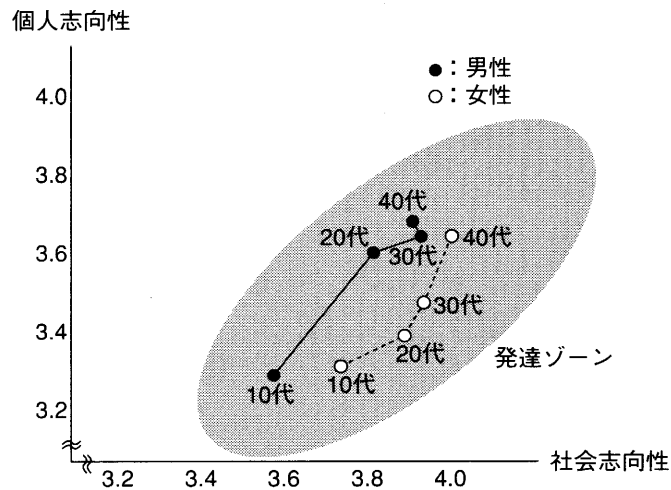
的に移行するものでもない。また、双方が互いに作用し合い促進し合いながらも同時並行に進むわけではないため、両者の発達段階に「ずれ」が生じることも起こりうる。つまり、他者との関係性の中で自己を形成していく個人の発達は、2方向の相互作用過程が必ずしも因果的に展開されるのではなく、互いに分立した2つの系が相補的・相乗的に関わりながら、発達という時系列を織り成していくのであり、そのプロセスの中で両系の発達差やバランスの取り方の違いに性差が見られるものと考えられる。

そこで、この2つの視点「個と関係性」を、性を特徴づける二分法的対立項としてとらえるのではなく、それぞれが人間の発達という1本のロープを練り上げる形で“分立しつつも関与しあう”発達の2方向ととらえたい。本稿では、それぞれを個人志向性・社会志向性という概念でとらえることにする。まず個人志向性とは、自他分離方向を志向し、個性的・主体的に「個」としての自己を生かそうとするあり方。一方、社会志向性とは自他合体への志向を意味し、社会で共有された規範や「他者との関係性」を重んじ他者との調和的共存や社会への適応を目指すあり方をいう。さらに2志向性は、個人化・社会化過程を促すというそれぞれに固有の機能を有し、一方、相互の緊張関係を解消しながらより成熟した状態へと自己を高める特性であると定義される。これら2志向性は、それぞれ互いに分立した発達の二側面をとらえているが、一方から他方へという順序性や因果関係ではなく相互補完的な関係にある。このように本稿では、この2つの方向性を「一個人の中にある人間存在をとらえる際の根源的次元」ととらえ、自己（個人）と他者（社会）及び両者のバランスという観点から成人期女性の発達のプロセスの一面について、実証データをもとに考察したい。また、年齢的要因だけでなく、社会的役割やライフスタイル、さらには「選択の主体」としての女性個人という観点を加えて、女性の成熟について考察を加えたい。

では先の視点に立つと、人間の発達はどのようなモデルで表されるのであろうか。まず、個人志向性の発達方向を「個人化」、社会志向性の発達方向を「社会化」とすると、人間の発達は2本の経路を縊り糸とする1本のロープのようなものと考えられる。これら2志向性は、方向（個人志向・社会志向）と力の大きさ（未発達から発達まで）を持ったベクトルとして表現され、ある時期の人間の発達は、これら2つのベクトルの合成による1つの点として位置づけられる（伊藤 1997）。これを2次元上に表すと、年齢が低い段階では2次元上の左下の領域にあたり、その後、年齢とともに対角線を右上方向にたどり、2志向性が共存的に高まった成熟領域に達するというモデルが描き出されることになる。

そこで、先の定義に基づく2志向性尺度（付録1参照）を構成し、それを用いて10歳代から40歳代以上の男女を対象に調査した。その結果、各年代の平均得点は、年齢の高まりとともに左下から右上へと移動していくことが明らかにされた（図1）。また、男性は個人志向性優位、女性は社会志向性優位に変化していくという特徴が見られ、この差は青年期で特に顕著であった。ここで見出された性差は、「男性は分離志向が強いに対し、女性は関係性への志向が強い」という従来諸理論（Gilligan 1982；高橋 1988など）に合致したものといえる。ただし、2志向性からみた発達図式では「順序性による束縛」から脱するために、これらの性差を発達段階の順序の問題（性による順序の逆転）とみなすのではなく、発達経路上の「幅」（伊藤 1993b）をとらえる立場をとりたい。それにより、図1に示すような2次元上の対角線上を健康な発達ゾーンとして想定することが可能になる。しかし、この図式では50歳代以降の変化については明確にされておらず、女性の生涯発達を論じるには不十分である。そこで、本研究では発達のな変化を確認するために、30歳代から60歳以上の女性を対象に、2志向性得点が年齢に応じてどのように変化していくかを検討する（このデータについては、伊藤（1997）で1部発表）。

図1 2志向性得点に見る発達的变化(伊藤 1993c)



1-2. 年齢以外で2志向性を規定する要因

また、伊藤(1997)からも示唆されたように、成人期女性の発達は、現実生活では他者(おもに家族)のために生きるというあり方から徐々に、自分も大切にしたい生き方へと移行していく。しかしその一方で、周りの人々の世話やより広い社会との関係に生きがいや自分らしさを見つけていくという面も持っている。この「家族から自分へ、そして社会へ」という変化は、年齢による成熟の特徴の一つといえる。アイデンティティ研究においても、加齢とともにアイデンティティの発達やアイデンティティ・ステータスの移行が見られるという報告(Freilino and Hummel 1985; Whitbourne and Waterman 1979; Whitbourne, Zuschlag, Elliot and Waterman 1992など)がある一方で、両者の間に関連は見られないという結果(Tesch 1985など)も出されている。成人期の発達に関しては、加齢による一般的傾向に加え個別的な要因が関与してくるため「個人を取り巻く諸要因の複雑性」(McAdams, Ruetzel and Foley 1986)をも含み込んだ視点が重要になるといえる。

そこで本研究では、年齢に加えて、成人期以降の個人差を規定する要因として、社会的役割に裏付けされたライフスタイルの違いに注目したい。特に現代では、「良妻賢母」が第一とされた時代とは異なり、就職・結婚・出産等々、人生のすべてのイベントに対し選択の自由と可能性が広がった。その結果、妻として、母親として、職業人・社会人として等々、いくつかの役割を抱えて生きる女性が増えている。現代を生きる女性にとってこれらの「役割」はどのような意味を持つのであろうか。

女性のアイデンティティと社会的役割の関連を調べた研究によると、職業が成人期女性のアイデンティティ獲得に果たす役割を論じた研究は多い(堀内 1993; 国眼 1994; O'Connell 1976; 岡本 1994; 岡崎・柏木 1995など)。しかしその一方で、現代社会においては、可能性として女性に与えられた選択肢の多さにもかかわらず、職場の現状との矛盾に苦悩する女性たちも少なくない(日本経済新聞社 1992など)。また再就職した女性の多くが就いているパートタイム勤務には「やりがいのない単調なものが多い」ため、パートタイム就労者の多くが仕事そのものに充実感を持ってないともいわれている(直井 1989; 岡村 1989)。

また親役割については、親としての体験が親自身の成長を促進するという報告（柏木 1995；柏木・若松 1994など）がある一方で、子育てによる時間的・精神的な束縛感のために子育て期にアイデンティティの危機を感じる者も少なくない。さらに、子育て後の親役割喪失の結果、空の巣症候群といわれる危機を体験する者も多いという（Shainess 1977; Silverberg, O'Neil and Owen 1991など）。現代女性は、自らのアイデンティティ達成と母親であることとは別のものと考える傾向にあり（大日向 1988）、育児体験とアイデンティティ達成および生活の満足感との間にも十分な関連性は見出されていない（岡本 1991）。ここに見られる葛藤の多くは、関係性に根ざした「母親アイデンティティ」と個の確立に基づいた「個としてのアイデンティティ」の相克（岡本 1997）であるといえる。

他方、現代社会において女性が担う多重な役割に注目し、その役割の多寡により心理的健康に差が生じるのか否かを検討した研究がある。役割が増加するほど身体的健康度が低いという報告（Langan-Fox and Poole 1995）がある一方で、Thoits（1986）は複数の役割同一性を持っていることが心理的健康に寄与することを見出している。また、有職の母親・専業主婦・独身有職女性を比較した結果、役割数の少ない独身有職女性が最も抑うつが高いという結果も出されている（Kandel, Davis and Raveis 1985）。一方、働く母親、単身女性、専業主婦を比べた結果、働く母親は多忙で疲労が強い反面で、生活への満足度も高いというプラス・マイナス両面を有することが明らかにされている（土肥・広沢・田中 1990）。このように、女性が担う役割の多寡による精神的健康度への影響については、必ずしも一致した見解は得られていない（小泉 1998）。以上のことから、配偶者役割・親役割・職業役割等を有することが成人期の発達に必ずしも一義的に關与するわけではないといえる。

そこで、ライフスタイルの変化とともに見落としてはならないのが「選択する主体」としての側面である。現在では、多様な生き方が可能になった半面、その役割の中から自分の生き方を自分で選択することが求められる。多くの選択肢の中からあるライフスタイルを選ぶことは自分らしさ（アイデンティティ）のあり方と密接に関係してくる（国眼 1994）。とりわけ現代の中年期女性の発達を考える際には、この自分の役割（＝外側に現れたアイデンティティの姿）と自分との間に相互性があるかどうか（岡本 1994）という視点が重要になる。ただし現実には、理想のライフスタイルと現実を選択された生き方とは必ずしも一致しない。また女性の生き方が多様になり主体的な選択がある程度許される現代社会では、理想と現実のずれは自己責任に帰因されやすく、それがかえって女性自身の不満や女性相互の葛藤を生むことになる。そのため女性の生涯発達をとらえる際には、どんな役割をどのようにこなしているかという客観的な事実（ライフスタイル）だけでなく、現実のライフスタイルと理想の生き方が合致しているか否かという観点から、理想の自分と現実の自分との差異 “self-discrepancy” に注目することが有効であるといえる（Higgins 1987; Alexander and Higgins 1993）。そこで本研究では、「理想と現実のずれ」を分析の観点として加味したい。

2. 目的

2 志向性からみた中年期女性の発達的变化について検討する。その際、女性の発達を規定する要因として「役割」(配偶者・親・職業)に注目し、ライフスタイルによる2志向性の差異を検討する。さらに、ライフスタイルにおける理想と現実のずれという観点からも検討を加える。

発達的な検討からは、2志向性の年代別平均点を付加することで発達モデル(伊藤 1997)をさらに補う。また、3役割の有無による検討からは、女性にとってこれら3役割がどのような意味を持つかについて考察したい。さらに、女性自身の理想と現実のずれに注目することで、「人生を選択する主体」としての女性自身のあり方についても検討を加え、その背景にある社会的問題についても考察する。

3. 方法

調査対象

全国15都府県にわたる35歳から65歳の女性700名(個人的つながりによる個別依頼)に配布し、353名から回答を得たが、そのうち有効回答335名分を対象とした(回収率は47.9%)。内訳は、30歳代56名、40歳代136名、50歳代98名、60歳代45名であった。本被験者の学歴は、中学卒4名、高校卒123名、短大・専門学校卒87名、大学・大学院卒84名、旧制女学校8名、不明29名であった。

調査内容

- ①個人志向性・社会志向性尺度(伊藤 1993a):17項目からなる(付録1参照)。「あてはまる」から「あてはまらない」までの5件法で実施した。
- ②年齢。
- ③結婚の有無(配偶者との死別・離婚経験の有無)。
- ④子どもの有無。
- ⑤職業の有無ならびにフルタイム・パートタイムの区別。
- ⑥現実のライフコース:経済企画庁国民生活局(1987)による女性のライフコースを表す8選択肢(付録2参照)の中から1つを回答するよう求めた。以下の分析では、O'Connell(1976)の<伝統型><新伝統型><非伝統型>に対応するように、以下の3コースに集約分類した。「一度も職業に就いていない」者と「結婚時あるいは出産時に退職し、以後専業主婦」を選んだ者を<専業コース>、時期の違いはあれ「子育て期以後、仕事に復帰した」者を<復帰コース>、結婚・出産とは無関係に「ずっと仕事を持ち続けてきた」者を<継続コース>とした。
- ⑦理想の生き方:自分の生き方の理想を以下の選択肢より1つ強制選択するよう求めた。「どちらかという家庭を重視したい(以下、家庭重視)」「どちらかという職業を重視したい(職業重視)」「ともに重視したい(ともに重視)」「わからない」の4択。
- ⑧SCT:「私にとって仕事とは」に続けて自由に文章を完成するよう求めた。得られた回答は「していない・夢である(したい)」「当然・義務」「(辛い・しんどい等の)否定的回答」「(生きがい・自己成長等の)肯定的回答」の4つにカテゴリー化した。

調査時期 1994年7月～9月。

手続き 個人的に依頼し、郵送にて配布・回収。無記名で行った。

4. 結果と考察

4-1. 年齢要因とライフスタイルからみた2志向性の特徴

個人志向性・社会志向性得点についての年代比較

回答者の年代により4群(30歳代・40歳代・50歳代・60歳代)に分け、それぞれの2志向性平均得点を算出した(表1)。4群の平均得点について群間差があるかどうかを検定するために分散分析を行った結果、個人志向性で差の傾向が見られ($F(3, 331) = 2.37, p < .1$)、年代が高い者ほど得点も高くなる傾向が見出された。

表1 年代別2志向性得点の平均と標準偏差

	30歳代 56人		40歳代 136人		50歳代 98人		60歳代 45人		分散分析	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	F値	多重比較
個人志向性	3.49	(.70)	3.64	(.59)	3.68	(.56)	3.81	(.61)	2.37 ⁺	30代<60代
社会志向性	3.97	(.50)	4.10	(.48)	4.06	(.49)	4.08	(.45)	n. s.	

⁺p<.1

ライフスタイル別2志向性得点と年齢の平均

ライフスタイルについては、表2に示すように、現在の婚姻状況(既婚か未婚か)と子どもの有無により4カテゴリーに分類し、その中でも人数の多い有子既婚者については、ライフコースによりさらに3分した。残る3カテゴリーについてはそれぞれ独立した型に分類した。これら6型について、配偶者との離婚・死別経験の有無、および就労形態に関する特徴から以下のように命名した。有子既婚のうち、現在専業主婦である<専業型>、子育て後仕事に復帰した者を<復帰型>、結婚・出産に関わら

表2 カテゴリー別個人要因の比較

	人(%)					
既婚・未婚 子どもの有無 ライフコース 人数*	既婚 有 専業コース 89人	既婚 有 復帰コース 105人	既婚 有 継続コース 49人	既婚 無 3コース混在 14人	未婚 有 3コース混在 18人	未婚 無 継続コース 44人
<離婚死別経験>						
あり	5(5.6)	8(7.6)	4(8.2)	0	18(100)	4(9.1)
なし	84(94.4)	97(92.4)	45(91.8)	14(100)	0	40(90.9)
<仕事の形態>						
フルタイム	-	48(45.7)	33(67.3)	6(42.9)	11(61.1)	35(79.5)
パートタイム	-	36(34.3)	5(10.2)	1(7.1)	2(11.1)	3(6.8)
無回答	-	21(20.0)	11(22.4)	7(50.0)	5(27.8)	6(13.6)
	↓	↓	↓	↓	↓	↓
ライフスタイルの型	専業型	復帰型	継続型	夫婦型	離婚型	独身型

* 既婚・未婚、子どもの有無、ライフコースについて未回答の者16人は6型分類からはずした。

** 専業主婦を選んだ者の中に、パートタイム勤務者が6人含まれていたが、本人の回答に従い専業コースにカテゴライズした。

ず仕事を継続している者を<継続型>とした。これに対し無子既婚者を<夫婦型>、離婚・死別いずれかの経験を持つ有子未婚者を<離婚型>、離婚死別経験を4人含む無子未婚者についてを<独身型>とした。

これらライフスタイル6型の平均年齢(表3)については、分散分析の結果、群間差が有意で($F(5, 331) = 5.35, p < .01$)、多重比較(Tukey法)の結果、最高齢の<専業型>と、<復帰型><独身型>との差が有意であることがわかった。一方、末子の平均年齢は<専業型><離婚型>では成人を過ぎており、<継続型><復帰型>では高校生相当であったが、その差は有意ではなく、いずれも養育面で手のかかる年齢は越えつつあると考えられる。

表3 各型の2志向性得点と対象者及び末子の平均年齢と標準偏差

タイプ名	専業型 89人	復帰型 105人	継続型 49人	夫婦型 14人	離婚型 18人	独身型 44人	分散分析 F値 多重比較	
個人志向性	3.57(.64)	3.70(.56)	3.85(.59)	3.41(.46)	3.91(.68)	3.55(.60)	2.91*	n. s.
社会志向性	3.97(.48)	4.16(.47)	4.12(.48)	3.92(.47)	4.09(.37)	3.94(.55)	2.37*	n. s.
年齢	51.58(8.59)	47.54(7.41)	47.94(8.75)	47.43(7.82)	49.89(9.83)	44.39(7.15)	5.35**	専>復, 独
末子の年齢	21.20(9.09)	18.07(8.08)	17.64(9.99)	-	22.29(9.11)	-	3.18*	n. s.

** $p < .01$ * $p < .05$

さらに、個人志向性・社会志向性の平均得点についてライフスタイル6型間の差を分散分析にて検定を行ったところ(表3)、ともに有意な差が見られた(個人: $F(5, 331) = 2.91, p < .05$; 社会: $F(5, 331) = 2.37, p < .05$)。6型の平均得点を比べると、個人志向性は<離婚型><継続型>が高く、<夫婦型>は低かった。社会志向性は<復帰型><継続型>、ついで<離婚型>が高く、<夫婦型>が最低となった。ただし多重比較(Tukey法)した結果、いずれも型間差は有意ではなかった。さらに、得点の上位3位までを占める<継続型><離婚型><復帰型>の特徴を概観すると、<離婚型>は個人志向性が、<復帰型>は社会志向性が6型中最高であった。ここで「男性は個人志向優位、女性は社会志向優位」という性差(伊藤 1993c)を考慮すると、一人で父親役も兼ねている<離婚型>と子育ての間仕事を中断し家事・育児に専念した<復帰型>が、それぞれ男性と女性の特徴に通じる傾向があるという結果は、2志向性と現実の生活役割が互いに関連を持つことをうかがわせる。ただしここで、父性と母性という概念が性に関係のない「親性」に置き換えられ、両性に必要な特性ととらえられていることを踏まえると、2志向性そのものも性に固有のものではなく、「作動性と道具性」(Bakan 1966)のように両性いずれにおいても統合される可能性があると考えられる。

次に、年代とライフスタイルという2つの要因が2志向性得点にどのように関与しているかを調べるために、先の年代(4水準)とライフスタイル(6水準)を2要因とする分散分析を行ったところ(表4)、年代の主効果は有意ではなく、ライフスタイルの主効果は個人志向性では有意($F(5, 295) = 3.02, p < .05$)、社会志向性でも有意傾向を示した($F(5, 295) = 2.21, p < .1$)。以上の結果より、中高年期女性の2志向性得点に対しては、加齢による変化よりも、むしろ家庭内や社会での役割や生き方といった社会的役割の方が、個人差を生む要因としての影響力が大きいといえる。

表4 年代・ライフスタイルを2要因とした分散分析 (F値)

	主 効 果		交 互 作 用
	年 代	ライフスタイル	
個人志向性	1.93	3.02*	1.10
社会志向性	.70	2.21 ⁺	.99

*p<.05 ⁺p<.1

3 役割の有無による2志向性の比較

次に、配偶者役割・親役割・職業役割という3役割を担うことが2志向性得点とどのような関連を持つかを検討するために、各型の個人志向性・社会志向性得点について、これら3役割の有無(表5参照)を3要因とする分散分析を行った(表6:3要因によるグループ分けを行うと被験者0のセルも現れたため、ここでは志向性得点に対する3要因それぞれの、主効果のみを検出した)。

表5 カテゴリー別3役割の有無

役割名	専業型	復帰型	継続型	夫婦型	離婚型	独身型
配偶者役割	+	+	+	+	-	-
親 役 割	+	+	+	-	+	-
職 業 役 割	-	+	+	+	+	+

+ : あり - : なし

表6 各役割の有無を1要因とした分散分析 (主効果のみ:F値)

役 割	全 体			30-40歳代			50歳代以上		
	配偶者	親	職業	配偶者	親	職業	配偶者	親	職業
個人志向性	1.75	8.91**	4.89*	1.21	4.54*	5.88*	.44	4.16*	2.02
社会志向性	.08	3.80 ⁺	7.04*	1.13	.22	1.35	.60	6.16*	6.63*

**p<.01 *p<.05 ⁺p<.1

すべての年代を込みに分析したところ配偶者役割の主効果は見られなかったが、2志向性とも職業役割の主効果は有意であった(個人:F(1,313)=4.89, p<.05;社会:F(1,313)=7.04, p<.05)。一方親役割の主効果は、個人志向性では有意であったが(F(1,313)=8.91, p<.01)、社会志向性では傾向にとどまった(F(1,313)=3.80, p<.1)。以上の結果より、2志向性得点は配偶者役割の有無に影響されないが、職業役割や親役割は女性の2志向性の発達には重要な意味を持ちうることを示唆された。

しかし、この年代の女性にとって「子育て」と「仕事」が持つ意味は、本人や子どもの年齢、さらには周りの状況によって異なってくると考えられる。たとえば、子どもの年齢によって母親としての自分に期待される役割は異なるであろうし、働き盛りの頃と定年近くの年齢段階とでは仕事を持つ意味もおのずと違ってくるはずである。そこで、被験者を年齢の高い群(50歳代以上)と低い群(30-40歳代)に二分し、先と同じ3要因分散分析を行ったところ、配偶者役割の主効果が有意ではないという点は両

群に共通していたが、親役割と職業役割では次のような差異が見られた。まず30-40歳代では、個人志向性に対して親役割と職業役割の主効果が有意であったが（親： $F(1, 180) = 4.54, p < .05$ ；職業： $F(1, 180) = 5.88, p < .05$ ）、社会志向性についてはそれらの主効果は有意ではなかった。これに対し50歳代以上では、社会志向性に対しては親役割・職業役割の主効果が有意で（親： $F(1, 131) = 6.16, p < .05$ ；職業： $F(1, 313) = 6.63, p < .05$ ）、個人志向性得点においても親役割の主効果は有意であった（ $F(1, 313) = 4.16, p < .05$ ）。このように、30歳代から40歳代では、親役割や職業役割の有無は個人志向性に影響するが、50歳代への移行とともに社会志向性に比重が移るといふ発達的特徴が見られた。つまり、中年期前半（30-40歳代）は家庭の中や社会で親役割や職業役割を持つことが個としての自信や独自性の高まりと関連を持つのに対し、50歳代以降、これらの役割が人との関わりや社会貢献を高める可能性のあることが示唆された。

以上の結果より、個人志向性・社会志向性という観点から見た中年期女性の発達的特徴を検討しておきたい。まず、年齢の高まりとともに2志向性得点も高まり、青年期から成人期を通して2次元平面上の対角線上を右上方向にたどっていくが、その変化が顕著なのは個人志向性であった。10歳代から40歳代にかけて、社会志向性が先行する形で得点上の変化が見られるという結果（伊藤 1993c）を考え併せると、女性の場合、青年期から若い成人期は人との関係性を意味する社会志向性を獲得し、その後中年期においては自分の個性や独自性を大切にしようという意識が高まることを示唆する結果であるといえる。

しかし、この年代要因よりも大きな影響を与えるのがライフスタイルの違いである。中年期を通して、2志向性に対する影響力が最も大きいのは職業役割と親役割である。特に職業役割の重要性については、職業が成人期女性のアイデンティティ獲得に果たす役割を論じた一連の研究（堀内 1993；国眼 1994；O'Connell 1976；岡本 1994；岡崎・柏木 1995など）と合致する。ただし、この職業役割の有無が影響するのは、40歳代までは個人志向性であるのに対し、50歳代を越えると社会志向性へと変化し、ここに年代による差異が見出された。30歳代から40歳代の女性にとっては、仕事を持つことが個性や独自性を大切にしようという生き方につながり、自分自身の生産性や達成度と関連を持つのに対し、中年期後半（50歳代以上）に入ると職業役割が「後進の世話」や社会への貢献という点での自己評価につながることを示唆しているとも解されよう。

さらに、親役割の有無が2志向性得点に与える影響も認められた。岡本（1991）では、就学期以前の子どもを持つ女性80人を含む100人の女性を対象とした調査の結果、育児への積極的関与とアイデンティティ達成および生活の満足感との間に関連性は見出されていない。本研究では、被験者の子どもの平均年齢がすでに手のかかる段階を越えていたため、現実の負担感は軽減され、子育ての経験あるいは子どもや孫との関わりがむしろポジティブな影響を与えたものと解される。ただし、30歳代から40歳代では3役割の有無による社会志向性の差は認められなかった。つまり中年期前半（30-40歳代）では、親役割・職業役割がともに個としての生き方を支えることになるが、それらの役割を果たすことが人とのつながりや社会への貢献感を促進する要因となるのは、中年期後半（50歳代以上）に入り家族という枠を越えた子育てへの関わりや後継者養成といった課題に直面してからであることを示唆するものと解されよう。

その一方で、配偶者役割の有無は年代に関わらず2志向性得点の高さには関与しない。中年期女性にとって未婚か既婚かの違いよりも、子どもや職業の有無、つまり親役割や社会での役割の方がより重要な意味を持っていることを示唆するものといえる。配偶者役割の影響力の低さは、20歳代を含む調査研

究でも言及されており（佐藤 1987）、現代の成人期女性にほぼ共通した傾向であるとも考えられる。これについては、先述のように、中年期女性にとって職業役割や親役割は個としてのアイデンティティの獲得に寄与したり、個としてのアイデンティティを揺るがすという形で大きな影響を与えるのに対し、現代社会のごく一般的な状況においては、配偶者としての役割は独立した個としてのアイデンティティを保ちながら果たしうると考えられ、そのためこの役割の有無は2志向性得点にもほとんど影響しなかったものと解される。

4-2. ライフスタイルにおける理想と現実の一致・不一致に注目して

次に、女性自身のライフスタイルにおける理想と現実が合致しているか否かという観点から、ライフスタイルにおける理想と現実のずれと2志向性との関連を検討する。

現実のライフスタイル6型が選択した「理想の生き方」

6型それぞれの理想の生き方を表7に示す。まず<専業型>で「家庭重視」の者は59.8%を占める。一方、「職業重視」と「ともに重視」の者は合わせて3割強であった。次に<復帰型>の場合、「ともに重視」の選択率は6割を越えた。一方「家庭重視」の者も約3割含まれていたが、これらの者はやむを得ない理由で仕事に復帰したという可能性が高い。また<継続型>については、「家庭重視」という意見を持つ者は少数で、「職業重視」「ともに重視」が約8割を占めた。さらに<独身型>については、「職業重視」の者は6.8%にすぎず、「家庭重視」「ともに重視」が7割強であった。またそれに加えて理想そのものが曖昧な者（「わからない」）が2割を越えている。これに対し<夫婦型><離婚型>は<復帰型>に似た傾向を示し、「家庭重視」は3割弱で、「ともに重視」は6割から7割を占めた。

以上のように、人数の少ない<夫婦型>と<離婚型>を除く4型については、<専業型>の過半数は「家庭重視」を理想とし、<継続型><復帰型>の過半数は家庭も仕事も重視した生き方を理想としていることがわかる。なかでも<継続型>は「ともに重視」の選択率は8割に近い。他方<独身型>については、理想とは異なる生き方をしている者、すなわち、家庭を持つという生き方（「家庭重視」あるいは「ともに重視」）を理想としながらも未婚のまま仕事を続けている者が多い。さらにこの<独身型>には、理想そのものが明確でない者もかなりの率で含まれる。つまり、中年期の未婚女性には、自分自身の理想から外れているという内的なギャップを抱え別の生き方を迷いながら模索している者が少なくないといえる。

表7 ライフスタイル6型の「理想の生き方」 人（型内%）

	専業型	復帰型	継続型	夫婦型	離婚型	独身型
家庭重視	52(59.8)	32(30.5)	6(12.2)	4(28.6)	5(27.8)	7(15.9)
職業重視	3(3.5)	4(3.8)	2(4.1)	1(7.1)	0	3(6.8)
ともに重視	26(29.9)	64(61.0)	39(79.6)	9(64.3)	13(72.2)	25(56.8)
わからない	6(6.9)	5(4.7)	2(4.1)	0	0	9(20.5)

注1 専業型では無回答が2人いた。

注2 下線部分は一致群

ライフスタイルにおける理想と現実の一致・不一致による比較

先の結果から、現実のライフスタイルと理想の生き方が合致している場合と合致していない場合があることがわかる。そこで、次に比較的人数の多い<専門型><復帰型><継続型>に注目し、実際のライフスタイルと理想の生き方が客観的・表面的に合致しているものを、以下のように操作的に抽出した。つまり「家庭重視」の専門型、「ともに重視」の復帰型と継続型を、「理想と現実が表面的に一致している群」(以下「一致群」と略記)とし、それ以外を「不一致群」とした。

ライフスタイル3型それぞれの一致群・不一致群を抽出し、各群の2志向性得点(表8)を図2に示

表8 ライフスタイル別一致群・不一致群の2志向性得点

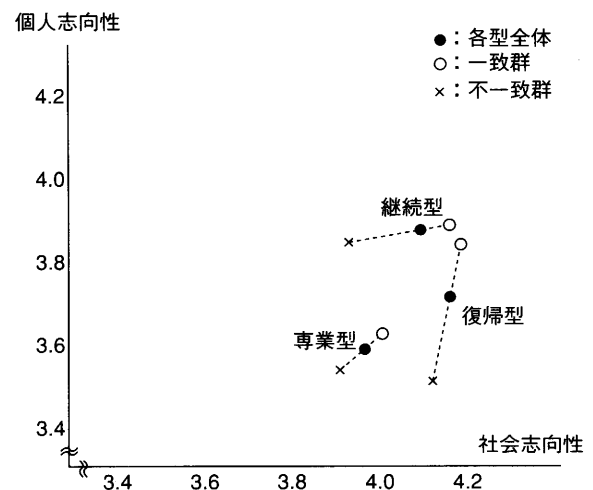
タイプ名	専 業 型		復 帰 型		継 続 型		主 効 果		
	一致群 52人	不一致群 35人	一致群 64人	不一致群 41人	一致群 39人	不一致群 10人	ライフ スタイル	理想と のずれ	交互 作用
個人志向性	3.61(.61)	3.53(.68)	3.81(.53)	3.52(.56)	3.86(.57)	3.83(.66)	2.69 ⁺	4.61 [*]	1.06
社会志向性	4.00(.46)	3.91(.50)	4.18(.53)	4.12(.35)	4.16(.46)	3.92(.54)	4.03 [*]	2.33	.45

*p<.05 +p<.1

した。現実には同じライフスタイルであっても、一致群と不一致群とではその得点に差が見られる。そこで、現実のライフスタイル(3水準)と理想と現実のずれ(一致・不一致という2水準)を2要因として分散分析を行った結果、個人志向性については理想と現実のずれの主効果は認められたが(F(5, 306)=4.61, p<.05)、現実のライフスタイルの主効果は有意傾向に過ぎなかった(F(5, 306)=2.69, p<.1)。この結果、個人志向性についてはライフスタイルによる差異はごく小さかったが、理想と現実が一致している群の方が不一致群よりも有意に個人志向性得点が高いということが示された。さらに、交互作用は有意ではなかったが、型により一致群・不一致群の差のあり方が異なっていたため、型ごとにずれの単純主効果を検定した結果、有意差が検出されたのは<復帰型>のみであった(F(1, 103)=7.51, p<.01)。つまり、個人志向性は現実のライフスタイルよりも理想と現実のずれにより強く規定され、理想と現実が一致している群の方が得点が高く、その傾向は特に<復帰群>に顕著である。これに対し社会志向性得点については、現実のライフスタイルの主効果のみが有意で(F(5, 306)=4.03, p<.05)、多重比較(TukeyのHSD法)の結果、<復帰型>の方が<専門型>よりも有意に高得点であった。

以上のように、配偶者役割と親役割を有す

図2 ライフスタイル別一致群・不一致群の2志向性得点の平均



る<專業型>に比べて、3役割を有する<復帰型><継続型>は2志向性ともに高く、特に<復帰型>は社会志向性、<継続型>は個人志向性の高さに特徴が見出せた。ただし、これら2型の一致群と不一致群を比べると、<復帰型>でのみ有意な差が見られ、不一致群の方が個人志向性が低いという結果が得られた。

復帰型と継続型の背景にある要因

そこで、3役割を有するという点で共通している<復帰型><継続型>を対比づけることにより、両型の違いの背景にある要因を検討しておきたい。まず理想の生き方については(表7参照)、<復帰型>の不一致群は8割近くの者(41人中32人)が「家庭重視」であることより、この群には職場に復帰しながらもそれを積極的に選択したわけではないという者が多く含まれているといえる。一方、親役割の意味(子どもに対して自分が果たす役割)を示唆する「末子の年齢」については、2型の間で有意な差は得られていない(表3参照)。さらに、仕事内容を検討するために就労形態(フルタイム・パートタイム)を調べたところ(表9)、両型の比率の差が有意で($\chi^2=4.64$, $df=1$, $p<.05$)、<継続型>では9割近くの者(38人中33人)がフルタイム勤務であるのに比べて、<復帰型>ではパートタイム勤務者が42.9%を占めた。さらに、この<復帰型>のパートタイム勤務の比率は一致群と不一致群で異なっており($\chi^2=10.34$, $df=1$, $p<.01$)、一致群ではパートタイム勤務が34.0%であるのに対し、不一致群では6割近くに達し、より高い比率を示した。

表9 復帰型・継続型各群の就労形態 人(%)

	復 帰 型		継 続 型	
	フルタイム	パートタイム	フルタイム	パートタイム
不一致群	13(41.9)	18(58.1)	8(88.9)	1(11.1)
一致群	35(66.0)	18(34.0)	25(86.2)	4(13.8)
小 計	48(57.1)	36(42.9)	33(86.8)	5(13.2)

以上のように、<復帰型>不一致群の約8割は家庭重視であり、その女性たちの半数以上の者がパートタイム勤務であるということが明らかになった。ここで、パート勤務の仕事内容はやりがいのない単調なものが多いため多くのパート就労者が仕事そのものに充実感を持ってない(岡村 1989)という報告を鑑みると、<復帰型>不一致群の個人志向性の低さには、理想のライフスタイルとのずれ(不本意感)に加えて、パートタイム勤務者が多いことによる仕事に対するやりがい感の欠如が影響していると考えられる。そこでそれを確認するために、SCT「私にとって仕事とは」に対して得られた回答内容を両型の間で比較した。回答は次の4カテゴリーに分類された。まず1つは「仕事はしていない、仕事をする事は夢である」という内容。2つめは「仕事は義務であり、当然のこと」という内容。3つめは「仕事は辛い、お金のためにしかたなく」という否定的内容。4つめは「仕事とは生きがい、楽しい」という肯定的内容としてまとめられた。その結果(表10)、<継続型>は一致群・不一致群ともに肯定的回答が過半数を占めるという点で共通していたが、<復帰型>では一致群と不一致群の間で差異が見られ($\chi^2=15.93$, $p<.01$)、一致群では肯定的回答が過半数を占めたのに対し、不一致群では肯定的回

答は17.1%に過ぎず、否定的回答が最も多かった(41.5%)。これより、〈復帰型〉不一致群の半数近くは仕事に対して否定的なとらえ方をしていることが明らかになった。

表10 復帰型・継続型各群の SCT「私にとって職業とは…」回答分布

		していない・夢	義務・当然	否定的内容	肯定的内容
復帰型	一致	2(3.5)	9(15.8)	15(26.3)	31(54.4)
	不一致	7(17.1)	10(24.4)	17(41.5)	7(17.1)
継続型	一致	3(8.1)	6(16.2)	7(18.9)	21(56.8)
	不一致	0	2(20.0)	2(20.0)	6(60.0)

5. 全体的考察

以上の結果をまとめてみたい。まず、女性の人格形成の一側面であると考えられる個人志向性・社会志向性の発達に関しては、年齢よりライフスタイルの差異のほうがより重要な規定因となる。今回は女性のライフスタイルを、家庭内外の役割という観点から「配偶者役割」「親役割」「職業役割」という3つの役割の組み合わせでとらえてみた。調査結果からは、中年期の女性にとって、配偶者役割(既婚か未婚か)はそれほど決定的な意味を持たないのに対し、親としての役割と職業人としての役割といった“生産的”役割が志向性の発達に大きな意味を持つことが明らかにされた。さらに、40歳代までは、親役割を生きることや仕事を持つことが個としての生き方への自信(個人志向性の高まり)につながるが、50歳代以上になると、これら親役割や職業役割を取ることが他者との関係性や社会への貢献(社会志向性の高まり)にも寄与する可能性が示唆された。得点の年代差から示されたように、50歳を越えると自らの生き方を尊重し個性化への方向に進むことを考え併せると、中年期も後半(50歳代以上)になると、自分自身の個としての生き方への評価を高めつつ、親役割や職業人としての役割を果たすことにより人との関わりや社会的貢献といった社会との絆も強めていくと考えられる。

ただし、ここでもう一点考慮しないといけないのは、女性自身のライフスタイルの現実と理想のずれである。現代社会では、「仕事か家庭か」ではなく「仕事も家庭も」という生き方への志向が強まっている。しかし、この傾向が顕著であるのは20歳代から30歳代の若年層であり、少なくとも現在の中老年層においては、仕事優先のライフパターンは特に支持されているわけではない(目黒 1987)。この傾向が今の時代にも通じるであろうことは、本データに現れた「家庭重視」の高さからもうかがえる(本研究では、「家庭重視」が全体の35.9%を占めた。参考までに経済企画庁国民生活局の調査(1987)では、20歳代で「家庭重視」を選んだ割合は15.1%、30歳代では11.1%であった)。つまり「仕事も家庭も」という生き方は中年期の女性に全面的に支持されているわけではない。したがって中年期女性の発達を論じる場合は、これらの多重役割の遂行をそのまま発達規定因とみなすのではなく、その個人がどんな生き方を理想とし、その理想が現実と一致しているのかどうかという点を加味して検討する必要がある。

そこでこの観点から検討した結果、個人志向性に対しては、ライフスタイルによる得点差よりも理想と現実のずれによる影響の方が大きいことが見出せた。特に、ずれを抱える不一致群の得点の低さは<復

帰型>に顕著であった。<復帰型>不一致群には家庭重視の者が8割近く含まれており、そのことからこの群の就労意欲は低いと予想される。つまり、<復帰型>不一致群の大半は積極的に仕事を望んだ者ではなく、家庭に入っていたいのに経済的な事情等で働かざるをえないという女性たち（消極的就労者）であり、不一致群の個人志向性得点の低さには就労そのものに対する不本意感も関与していると考えられる。さらに、この仕事への志向性の低さは就労形態からも裏付けられた。つまり、<継続型>では一致・不一致に関わらずフルタイムの仕事に従事している者の割合が高いのに対し、<復帰型>不一致群ではパートタイム勤務者が過半数を占める。このように、<復帰型>には就労意欲が低い者が多いうえに、携わっている仕事の多くはやりがいを持ちにくいとされるパートタイム勤務である。しかも、この女性たちには仕事に対して否定的な受け取り方をしている者が多い。子育ての後に正社員として職場復帰するというのが現実的にも容易なことではなく、本人自身も正社員として勤務しようという意欲の低いまま、不本意な仕事に消極的に再就職せざるを得ない女性が少なくないというように、中年期の女性にとって働きがいのある就労を困難にする状況が何重にも存在することに気づかされる。ただし、この点については、家庭重視だから（仕事への意欲も低く、その結果）パート勤務に就くというパターンもあると考えられ、そこには一通りでない背景要因が絡み合っていると考えられる。

一方、社会志向性に関しては、ライフスタイルにより大きく規定され、本人の理想と現実とのずれの有無はあまり関与しないことが明らかになった。これは、個としての生き方や個性・独自性を大切にする特性である個人志向性が、本人の意志が関わる理想と現実のずれにより強く規定されるのに対し、他者や社会との関係を尊重するあり方を意味する社会志向性に対しては、現実生活における他者に対する役割（ライフスタイル）のほうがより大きく関与するということを意味している。

以上の結果、中年期女性の発達を2志向性という観点から見た場合、この得点の高さを規定するのは年齢より、むしろ「あれもこれも」という多重役割（特に職業役割と親役割）の有無であることが示された。ただし、その役割の影響のあり方は年代によって異なっており、40歳代までは個としての達成に、50歳代を越えると人や社会との関わりという側面に關与する。さらに個としてのあり方（個人志向性）については、その役割の組み合わせからなるライフスタイルよりも大きな影響力を持つのが、その個人の意志がより反映されやすい理想と現実のずれである。特に<復帰型>は一致群と不一致群の差が大きく、現実のライフスタイルが理想の生き方と合致しているかどうかはその差異を決定づける要因となっている。しかも、仕事も家庭も手にしている<復帰型>の女性すべてが必ずしも個としての達成（個人志向性）において満足していないという背景には、本人の意志に関わらず仕事を持たざるを得ないという経済事情、さらには主婦が職場に復帰しようとしたときに「やりがいのない単調なものが多い」（直井 1989; 岡村 1989など）パートタイム勤務しか提供できないという今日の労働社会の問題を読みとることができる。

伊藤（1997）では、人間の発達を個人化・社会化という2つの過程が相互作用を繰り返しながら展開されていくプロセスとしてとらえる視点を提供し、2志向性得点の変化を横断的に調べた結果、発達的には両得点が共存的に高まることが見出された。本研究ではこの結果を踏まえ、ライフスタイルならびにその理想と現実のずれという変数を加えることにより、個人志向性には本人の理想とのずれが、また社会志向性には社会的役割に裏付けられたライフスタイルの違いがそれぞれ関与していることが示された。さらに就労形態や仕事観という要因を加味することにより、中年期女性の発達は個人的な要因（年齢やライフスタイルなど）だけでなく社会的な要因（経済事情や就労条件など）によっても規定され、

それらの相互作用の中で練り上げられていく力動的なプロセスであることが示唆された。ただし、本研究で取り上げた理想と現実のずれは、あくまで表面的で操作的な指標に過ぎない。理想の生き方とは異なっているとしても、女性自身はその生き方に納得しそれを受容していることもあるだろう。あるいは理想とのずれを将来志向的な成長へのエネルギーとしている場合もあろう。そして、それらは客観的な数量データではとらえきれないものである。女性自身の内面で起こっている「諦め」や「納得」、さらには「受容」や「昇華」のプロセスをより丁寧に追究していくことを、今後の課題として挙げておきたい。

複数役割の選択が「可能性としては」許されている現代社会において、仕事と家庭、両役割をこなす自己実現を果たす女性の姿がクローズアップされる中、このダブル・ロールを礼賛する傾向が、逆に一部の女性自身へのプレッシャーとなっているという実態の一面が示唆された。女性の生き方が多様化しているという現象のみに目を奪われるのではなく、女性自身の主体的な生き方選択を阻んでいる社会の問題にも目を向ける必要がある。それらの条件が整ってはじめて、女性のライフスタイルの多様化が実態を伴ったものになるといえよう。

(お茶の水女子大学人間文化研究科助教授)

注

1. 本研究では、分析に先立ち勤務状況の違い（フルタイム140人、パートタイム49人）による2志向性得点の差（個人志向性：フルタイム $M=3.65$, $SD=.66$ 、パートタイム $M=3.60$, $SD=.52$ ；社会志向性：フルタイム $M=4.11$, $SD=.51$ 、パートタイム $M=4.07$, $SD=.46$ ）を検定したところ、有意な差はないことが確認された。そのためライフスタイル分類については、被験者自身が「有職」と回答している場合は、フルタイム・パートタイムを含めて「有職者」と扱うことにする。

参考文献

- Alexander, M. J., & Higgins, E. T. "Emotional Trade-Offs of Becoming a Parent : How Social Roles Influence Self-Discrepancy." *Journal of Personality and Social Psychology* 65 (1993): 1259-1269.
- Bakan, D. *The Duality of Human Existence: An Essay on Psychology and Religion*. Chicago: Rand McNally, 1996.
- 土肥伊都子・広沢俊宗・田中國夫 「多重な役割従事に関する研究：役割従事タイプ、達成感と男性性、女性性の効果」『社会心理学研究』5(1990):137-145.
- Freilino, M. K., & Hummel, R. "Achievement and Identity in College Age vs Adult Women Students." *Journal of Youth and Adolescence* 14 (1985): 1-11.
- Gilligan, C. *In a Different Voice: Psychological Theory and Women's Development*. Cambridge: Harvard University Press, 1982. 岩男寿美子監訳、生田久美子・並木美智子共訳『もうひとつの声—男女のちがいと女性のアイデンティティ』川島書店、1986年。
- Helson, R., & Moane, G. "Personality Change in Women from College to Mid-Life." *Journal of Personality and Social Psychology* 53 (1987): 176-186.
- Higgins, E. T. "Self-Discrepancy: A Theory Relating Self and Affect." *Psychological Review* 94 (1987): 319-340.
- Hodgson, J., & Fischer, J. L. "Sex Differences in Identity and Intimacy Development in College Youth." *Journal of Youth and Adolescence* 8 (1979): 37-50.
- 堀内和美 「中年期女性が報告する自我同一性の変化—専業主婦、看護婦、小・中学校教師の比較—」『教育心理学研究』41(1993):11-21.
- 伊藤美奈子 「個人志向性・社会志向性尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討」『心理学研究』64(1993a):115-122.
- . 「発達理論・発達モデルの諸問題と新たな視座の提唱—個人化・社会化を統合的にえうる発達理論の探索—」

- 『神戸国際大学紀要』44(1993b):61-77.
- 。「個人志向性・社会志向性に関する発達の研究」『教育心理学研究』41(1993c):293-301.
- 。「成人期の発達に関する一試論—中高年における意識変化をとらえる項目の収集とその検討—」『南山大学紀要アカデミア人文・社会科学編』63(1993):343-371.
- 。「個人志向性・社会志向性から見た人格形成に関する一研究」京都:北大路書房、1997年。
- 。「人間の発達をとらえる際の2志向性概念の提唱」『心理学評論』41(1998):15-29.
- 。「現代青年における同一性と親密性との関連について」『心理学評論』42(1999):35-41.
- Josselson, R. L. *Finding Herself: Pathways to Identity Development in Women*. San Francisco: Jossey-Bass, 1987.
- Jung, C. G. *Psychological Types*. New York: Routledge & Kegan Paul, 1921.
- Kandel, D. B., Davis, M., & Raveis, V. H. "The Stressfulness of Daily Social Roles for Women: Marital, Occupational and Household Roles." *Journal of Health and Social Behavior* 26 (1985): 64-78.
- 柏木恵子「親子関係の研究」柏木恵子・高橋恵子編『発達心理学とフェミニズム』京都:ミネルヴァ書房、1995年。pp. 18-52.
- 柏木恵子・若松素子「『親となる』ことによる人格発達:生涯発達の視点から親を研究する試み」『発達心理学研究』5 (1994):72-83.
- 経済企画庁国民生活局『新しい女性の生き方を求めて—長寿社会における女性のライフコース—』大蔵省印刷局、1987年。
- 小泉智恵「職業生活と家庭生活」柏木恵子編『結婚・家族の心理学—家族の発達・個人の発達—』京都:ミネルヴァ書房、1998年。pp. 186-232.
- 国眼真理子「女性らしさと自分らしさの間で」岡本祐子・松下美知子編著『女性のためのライフサイクル心理学』東京:福村出版、1994年。pp. 91-112.
- Langan-Fox, J. and Poole, M. E. "Occupational Stress in Australian Business and Professional Women." *Stress Medicine* 11 (1995): 113-122.
- McAdams, D. P., Ruetzel, K. and Foley, J. "Complexity and Generativity at Mid-Life: Relations among Social Motives, Ego Development, and Adults' Plans for the Future." *Journal of Personality and Social Psychology* 50 (1986): 800-807.
- 目黒依子「家族経歴と職業経歴からみた女性のライフコース」経済企画庁国民生活局編『新しい女性の生き方を求めて—長寿社会における女性のライフコース—』大蔵省印刷局、1987年。pp. 176-179.
- 直井道子『家事の社会学』東京:サイエンス社、1989年。
- 日本経済新聞社『女性たちは今』東京:日本経済新聞社、1992年。
- O'Connell, A. N. "The Relationship Between Life Style and Identity Synthesis and Re-Synthesis in Traditional, Neotraditional and Nontraditional Women." *Journal of Personality* 44 (1976): 675-688.
- 大日向雅美『母性の研究』東京:川島書店、1988年。
- 岡本祐子「成人女性の自我同一性に関する研究」『広島中央女子短期大学紀要』28(1991):7-26.
- 。「成人期における自我同一性の発達過程とその要因に関する研究」東京:風間書房、1994年。
- 。「女性のアイデンティティ発達の心理学」京都:ナカニシヤ出版、1997年。
- 岡村清子「家事の性格と家事意識」直井道子編『家事の社会学』東京:サイエンス社、1989年。pp. 81-112.
- 岡崎奈美子・柏木恵子「女性における生活の満足感—既婚・有子女性の場合—」『発達研究』11(1995):111-124.
- 齋藤久美子「青年期後期と若い成人期—女性を中心に」小川捷之、齋藤久美子、鎌幹八郎編『ライフサイクル』東京:金子書房、1990年。pp. 163-176.
- 佐藤洋子「『女性のライフコース』に関する考察」経済企画庁国民生活局編『新しい女性の生き方を求めて—長寿社会における女性のライフコース—』東京:大蔵省印刷局、1987年。pp. 166-170.
- Shainess, N. "Treatment of Crisis in the Lives of Women: Object Loss and Identity Threat." *American Journal of Psychotherapy* 31 (1977): 227-237.
- Silverberg, R. W., O'Neil, J. M. and Owen, S. V. "Predictors of Adult Men's Gender-Role Conflict: Race, Class,

- Unemployment, Age, Instrumentality-Expressiveness, and Personal Strain.” *Journal of Counseling Psychology* 38 (1991): 458–464.
- 高橋裕行 「同一性と親密性の危機の解決における性差—自我同一性地位の Rasmussen の EIS による併存的妥当性の検討—」『教育心理学研究』36(1988):210–219.
- Tesch, S. A. “Psychosocial Development and Subjective Well-Being in an Age Cross-Section of Adults.” *Journal of Aging and Human Development* 21 (1985): 109–120.
- Thoits, P. A. “Multiple Identities: Examining Gender and Marital Status Differences in Distress.” *American Sociological Review* 51 (1986): 259–272.
- Whitbourne, S. K. and Waterman, A. S. “Psychosocial Development during the Adult Years: Age and Cohort Comparisons.” *Developmental Psychology* 15 (1979): 373–378.
- Whitbourne, S. K., Zuschlag, M. K., Elliot, L. B. and Waterman, A. S. “Psychosocial Development in Adulthood: A 22-Year Sequential Study.” *Journal of Personality and Social Psychology* 63 (1992): 260–27.

付録1 個人志向性・社会志向性尺度の項目

<個人志向性>

2. 自分の個性を活かそうと努めている。
3. 自分の心に正直に生きている。
5. 小さなことも自分ひとりでは決められない(#).
7. 自分の生きるべき道が見つからない(#).
9. 自分が満足していれば人が何を言おうと気にならない。
13. 自分の信念に基づいて生きている。
15. 周りとは反対でも、自分が正しいと思うことは主張できる。
17. 自分が本当に何をやりたいのかわからない(#).

<社会志向性>

1. 人に対しては、誠実であるよう心掛けています。
4. 他の人から尊敬される人間になりたい。
6. 他の人の気持ちになることができる。
8. 他人に恥ずかしくないように生きている。
10. 周りとの調和を重んじています。
11. 社会のルールに従って生きていると思う。
12. 社会（周りの人）のために役に立つ人間になりたい。
14. 人とのつながりを大切にしている。
16. 社会（周りの人）の中で自分が果たすべき役割がある。

#：反転項目 文頭の数字は提示順序

付録2 女性のライフコース（経済企画庁国民生活局，1987より）と3分類

- タイプ1：結婚し出産。職業経験はない。
- タイプ2：職業につき結婚時退職。出産後、育児が一段落した後再び職業に就いた。
- タイプ3：職業につき結婚。出産時退職し、育児が一段落した後再び職業に就いた。
- タイプ4：職業につき結婚・出産。結婚時退職、以後専業主婦。
- タイプ5：職業につき結婚・出産。出産時退職、以後専業主婦。
- タイプ6：職業につき結婚・出産。職業を持ち続けてきた。
- タイプ7：職業につき結婚。出産はせず職業を持ち続けてきた。
- タイプ8：結婚せず職業を持ち続けてきた。

専業コース＝タイプ1・4・5

復帰コース＝タイプ2・3

継続コース＝タイプ6・7・8